

## 学勞窟回顧

青柳 潔

加藤玄智先生がお元気のころは、先生を中心として「藤文学会」があつて、哲学、宗教はもとより文学、史学、芸術にいたる広範囲な討論や研鑽がなされていた。いま先生の御逝去から十年を閲してふたたび「加藤玄智博士記念学会」が誕生したことは、門下の列に加えていただいた私としては無上の喜びである。往年の「藤文学会」の交友はまことに清らかで「君子の交り」にふさわしいもので、学習共同体とでもいうべき性格のものであつた。先生はお若いころ「知と信」の問題について深い

思索を重ねられたが、ここに先生の学問の出発点があつたと私は拝察している。先生の学位論文は大正十二年の大震災火災の時に東大図書館で烏有に帰したが、節子夫人の覚え書の『知信関係論』一篇にその面影を残し、『慧命存稿』の中に収められている筈である。従つて先生の学が倫理的な実践を重視する一面を有することは当然であつて、先生晩年のお言葉「一真万光」「精進常楽」の語も、こうしたところに因由すると私は考へている。

昔の御殿場町東山池ノ上という所に先生は別荘をお持ちであつた。そこは風光明媚な場所で、節子夫人が「ゐながらに富士の高嶺の晴れくもり常にながむるわが庵の窓」と詠まれたように富嶽を目近に仰ぐことができた。先生が晩年をすごされたところでもあり、「学勞窟」と名づけられていた。私はその頃は毎年春、夏、冬の休暇には先生をそこにお訪ねして数日間滞在させていたのだのである。先生は私のような者まで丁重にしてください、入浴の時などはいつも先生よりも前にしていただいた。先生のお世話をしておられた杉浦千代女史も立派な方で、細かいところまで気を遣つてお世話しておられ

た。私は「至誠」を人間存立の根本原理とされた先生の偉大さをひしひしと感じさせられたのである。

先生は「至誠」の顕現を乃木將軍の人格に見ておられた。これが先生と若い頃の私とを結ぶ紐帯となつたのである。昭和三十年に『弘道』という雑誌に私は「加藤博士著英文『聖雄照叙神道要義』を読んで今岡植木両君の所見を評す」の一文を草した。私は加藤先生が宗教体験へのふかき開眼を乃木大將の自決に直面した人格的な感動に得ておられると拝察したのである。私は毒杯をあおいだソクラテスの死、十字架にのぼつたキリストの死をも例にあげつつ小論をすすめたのであった。

昭和十四年九月に、先生は節子夫人を喪われた。その時先生は「呼べどよべどかへらぬ人と思へどもことわり知らぬわが涙かな」と慟哭されたのである。このころ佐々木信綱博士は「み教へをうけし人みなこの秋のさびしき風に君しのぶらむ」「せこにあこに齡ゆづりてとこしへの花さく園にいにし君はも」の弔歌をよせられた。夫人は学徳ともにすぐれた方で学者家庭の理想的な内助者であられた。そして「み仏のように慈悲円満な方」と知

人や教え子の方々から敬慕されたが、夫人を偲ぶ『詩歌連理集』が昭和十五年に発刊された。これには夫人の遺文や先生の詩歌、学界知友や教え子の方々などの文章が春蘭秋菊の清香を放っている。松江の旧藩主松平直亮伯爵は夫人の盛徳を偲んで「清節」の二字を寄せられたので先生はこれを学勞窟の居室に飾られて常に夫人を追憶されていたのである。ずっと後になってこれは出雲大社宝物殿へ寄贈されたと拝聴している。先生が夫人を追慕される至情は先生が神に帰せられる日まで少しも変わることはなかった。これは驚くべきことで私には、「至誠愛」の姿と思われたのである。その当時日本大学の福原武講師は「清節遺芳」という一文を書かれた。私は後になつてから夫人の遺徳を偲んで「幽頭」誌上に「婦徳への思慕」と題して拙い文を書いた。夫人の十三回忌にも多くの詩文が寄せられたが、三宅雪嶺博士の令息の夫人美代子女史は「つつましくけだかくいますみ姿を夏ごとに来てしのびまつるも」のほか六首を寄せられた。私も「清節の遺香高き白菊」の一文を節子夫人の霊前に献じたのである。

私は結婚の媒妁を先生にお願いしたところ、先生は快諾されたが、丁度戦局が苛烈を極めた時であったので実現は不可能となった。

この時に、結婚記念にと先生は、節子夫人が先生と結婚された時に用いられた「かんざし」と祝福の歌を色紙に書いて贈ってくださった。

また、先生が御前講演の際、拝領した銀盃と御著書を私にくださったことがある。その時先生は、「私は老いた。私が僧侶ならば君に衣鉢を伝えるのだが、これを君に贈る。私と違ってほしい」と仰言った。学勞窟を辞去した私は涙をポロポロこぼしながら、見上げた冬空の朝の富士山が美しかった。この時いただいた書物は私の息子が短大で授業する時に、役立たせていただいている所もあるので、その学恩には深い感謝を捧げている。それから先生は「至誠」の二字を書して夫人に与えられたことがあったが、夫人はこれを終生身辺から離されなかつたという。これも私は先生から頂戴しているのである。私はこれらの品を加藤博士御夫妻の遺品として桐の箱に納めて大切にしている。

私の向学の志を、先生は久松潜一博士にお話くださった。昭和二十一年七月であった。その八月に二十一日から二十四日まで私が学勞窟に先生をお訪ねした時、先生は私に、先生宛の久松先生の御手紙をくださった。それは次のようなものであった。

拝復、暑さきびしき折から御機嫌よき御事、大賀の至りに存上候。さて一昨日は、はからずも御たよりに接し、有りがたく拝読いたし候。はげしき世の移りゆきに感無量に御座候。御殿場に静かに御研学まことに御心境さこそと存上候。

私もなほ残生を都塵の中にすこし居り候へども心は故園の山川に駆せ候。なほ未完成の文学評論史、古代和歌史の完成に心を傾け居り候。青柳氏なかなか熱心なる方らしく御大成をいのり上げ候。明日より郷里に十日ほど帰る心ぐみにて右のみ申し上げ、御機嫌よき御事ふかく賀し上げ候。こうして私は、久松先生の御自宅に、また、東大の研究室に、先生の懇切な御指導をいただくようになったのである。昭和三十年六月に久松先生の還暦祝賀会が上野、精養軒で催されたが、その時加藤先生は、祝賀の詩

一篇を賦された。

学徳深高大。 光風声誉芳。

献君華甲頌。 仁者寿而康。

この賀詩を私は先生から託されて、祝賀会の席で久松先生にさし上げたのである。市古貞治博士がこれを参会の方々に披露された。私はその時次の二首を詠んだ。

「久松博士還曆の賀よみなつきの若葉照りつつ日は静かなり」「碩学の慈顔やさしく老いませる師が前にあり今日のささわひ」久松先生も昨年三月逝去されて私はまことに感慨無量である。

加藤先生が九十一才で逝去されてからの一周年忌に、東京武蔵野市の聖徳学園の理事長和田玄之氏から求められて「加藤先生のことなど」という題で思い出を書いた。これは同学園の「聖徳」に掲載されている。また同学園では、加藤先生の詩集を『東山詩藻』と題して、先生の三回忌に出版された。私が先生からいただいた御たよりの中から、和歌漢詩あわせて四十篇ほどもこの『東山詩藻』の中に収められている。

私の父が死去した時に、先生は「横斜疎影動。新淚旧

時情。春返無人返。黃鸝今昔声」と哀悼の詩を贈ってくださった。この先生の詩は、母が死去した時に徳富静子刀子自（蘇峰翁夫人）からいただいた「なでしこのやさしき花にかぎりなきみ母の情しのぶ君かな」の一首とともに、私の父母の墓辺に献詠碑として建てられている。もちろん、加藤先生、蘇峰翁お二方のお許しをいただいた上のことである。

加藤先生はある時私に。

過まつは人 (To err is human)

許すは神 (To forgive divine)

と寛容の徳の大切なことを諭されたことがあった。長井真琴博士は「三十年間の交際で節子夫人の不愉快な顔は一度も見たことがない」と感嘆されたと聞いている。

加藤博士は一世の碩学と仰がれた方であったが、私には先生も節子夫人も、こよなき人生の師であった。私は不敏な者ではあるけれども「学問への誠実」も、人間への「まこと」も失ってはならぬと自戒しているのである。私が師事した碩学の師は常に私を見つめていてくださるように思える。(足利工業大学付属高校)